

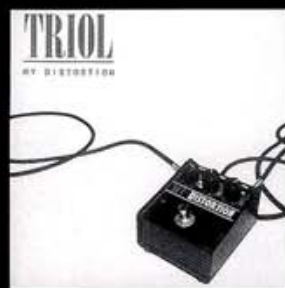
POWER PLAYSOUND

Music is moistened our life.
Tasteful album is here.
We'd like to find your recommended one.



「TRIOLはどんどん進化していく気がする」 JUN

「…だな」 LYOKI
「(笑)」 SHUNSKE



TRIOL / トリオール

左から順に、JUN (Bass)、SHUNSKE (Drum)、LYOKI (Vocal & Guitar)
http://www.lyoki.com
http://www.deadgirls.co.jp

03年結成、04年からライブ活動開始。そして05年6月29日に『MY DISTORTION』でデビュー。「朝起きたらスタジオ行って夜帰ってメシ喰って寝てまたスタジオいきたい」というスタジオ狂女でもある

MY DISTORTION

TRIOL DEAD GIRLS 2100円 (税込)

切っ端からラストまでガツンと熱い感情が胸に響き続ける全13曲、41分46秒。静と動の混在するサウンドの中にちりばめられたインプロヴィゼーションの匂い—グランジという言葉で括りつけることが失礼なのかもしれない。

「昔『スケープゴート』ってバンドやってて辞めて『バンドなんかもうやんねえ』って決めてただけで、2年前に花見やって、そこにJUNもいて『たしかギターかベースやってたよな、バンドやんねえ?』って声をかけて。そのちょっと前にスケボーやってるときにSHUNSKEに会って、ドラムできるって言うから、『じゃあベースもいるしバンドやるか?』って。最初は遊びでやるって思ってたく<LYOKI>』と言うように遊び半分ノリからスタートした。ところが、ある。いざスタジオへ入ると『3人の息が合って、音楽的な趣味も合うし、3人のクリエイティビティがアップしちゃって、あっこれイイね、このテンションでライブして、上手いと思ったら音源作って回って売っていかうぜってなって。そしたらこんな結果になったんだけどね<LYOKI>」

「こんな結果」とはデビューする事であり、アルバム『MY DISTORTION』を創りあげたことでもある。「1回目のスタジオでアルバム13曲目の『MAKE A NEW TRICK』ができちゃったから。この曲は20数コード使って複雑なんだけど、これが一番最初だったからこの曲を聴いてもらえればどれだけよかったか解ってもらえると思う。一回もアレンジしてないから<LYOKI>」。初期衝動的に生まれた複雑な1曲目がある反面、収録されている他のナンバーは至ってシンプル、というより贅肉を削ぎ落として感情の起伏がストレートに伝わってくる。あれだ、'90年代を席巻したあのグランジバンド「ニルヴァーナ」に通じるものがある。

「うん、まず難しいことはやりたくないっていうのがあって。最初はすごい複雑な曲をやろうとしてただけで、この状態で続いたら曲なんて覚えられないし、俺らみんな他にも趣味があるし…だからバンドで難しいことやったら絶対まともないだろうって。3ピースだから物足りなさを与えないために、やっぱり普通の時にギターはクリーンにしてドーンと出したいときにディストーションをぶっかます方法を使えば、それなりに曲の太さだったりメリハリがつけたりするから。それで、ニルヴァーナっぽいサウンドになってると思うんだ<LYOKI>」。実に明快な答えである。

「でもハッキリ言ってニルヴァーナよりギターとベースはジャズっぽいことやってるし、実際ジャズコードしか使ってないんだけどね<LYOKI>」。[そう、常にみんなジャズだね。ベースはジャズ。最初はジャズグランジとかボサノヴァとかもやろうとしてたの(笑)。あとヘヴィメタノバ? ヘヴィノバ(笑)? それを削ぎ落としていくところになった。狙ったわけじゃなくて、偶然こうなった感じ。だから今後はもっとジャズになるかもしれないし、ファンクっぽくなるかもしれない<JUN>」。

モデルのLYOKI・JUN、スケーターのSHUNSKE…バンドとして語る前にこの横文字が冠として付きまとう。が、一度『TRIOL』の音を聴けば、それがいかに無意味なものかを実感できるはずだ。かつて「ニルヴァーナ」にグランジの洗礼と衝撃を受けたように、彼らからも同じポテンシャルを感じずにはられないのだ。

「日の丸弁当」が「エスニックフード」が。「蕎麦」が「パスタ」が。要はそう言うこと。



昨年の応募実績から。中には「着物に対する冒険だ」「これは着物と声もあまるだろう。冒険上等、呼ばなくても結構。着物の定義を論ずるが主眼ではない

「もはやお馴染み」を意識すれば「見飽きた聞き飽きた」である。今年、8回目を迎えるイベント「創作きものコンテスト」。全国各地から学生を中心に応募を募り識者に審査を願おうという非営利イベントで、主旨は「明日の着物を模索する」「見失いがちな日本独自の『古き、良きもの』の再発見」「若者の自由な発想で着物の持つ可能性を伸ばす」…。

意識すれば「儲けじゃなくてですね、若いヤツに自由に着物をデザインしてもらうんですよ」だ。「着物」の言葉に凝り固まったイメージができてしまったとして、そこはいつたんチャラにして、物事をもう少しシンプルに考えてみよう。「日本の服」は「アジアの服」に含まれるから「エスニック・コスチューム」

で、「日の丸弁当」だって「アジアン・エスニック・フード」だ。目の前に着物があれば「自分がこれを着たら」と想像する。それだけで良い。その時にどんなシーンが思い付くか? カップルで日本酒を差しつ差されつ飲んでるのか、冷房の利いたカフェでお茶を飲んでるのか? 何かベストなシーンがあるはずで、想像するだけで必ず心が豊かになる。

「水着と同じく年に1本、浴衣を新調」というご時世、「今日はジーンズにするか、6ポケットを履くか」「昼は蕎麦を食べるか、パスタにするか」、そういうシチュエーションに、服を選ぶようになれば良いと思うのだが、いかがだろうか。主催者・共催者の名前はお堅いが、ぶっちゃけ、そんな問いかけなんすよ。

●第8回「創作きものコンテスト」

開催日時 ■平成17年8月20日 19:00~
開催場所 ■新風館 京都市中京区烏丸通姉小路東南角
主催 ■京都染織青年団体協議会
共催 ■京都府・京都市
審査員 ■市田ひろみ審査委員長・中野裕通・平野徳太郎
菅井英子・オリヴィエ・サイヤールほか
問い合わせ ■京都染織青年団体協議会
京都市下京区四条通室町東入ル 京都産業会館5F
☎075-211-0605 http://www.kimono.co.jp/kyogikai/